担当：阿部小涼（あべこすず）
法文研究棟 331 室
課題提出：kosuzu@eve.u-ryukyu.ac.jp

お知らせ

▼「環境トークセッション＆ライブ」
http://www.ocjc.ac.jp/osirase/08/20080515_fairtrade/fairtrade_s_ocjcix.htm
5 月 29 日午後 4 時 20 分〜6 時 30 分
開催場所：沖縄キリスト教学院大学・短期大学チャペル
料金：無料
主催：沖縄キリスト教学院　国際平和文化交流センター
電話番号：098-946-1295
内容：写真家の今泉真也さん、アーティストのカクマクシャカさんと KEN 子さんを迎え、沖縄の自然（開発、基地建設）に関する問題や、地球全体の環境について考えます。今泉真也写真展‘From Peace’も同時開催。

▼大学キャンパスでセクハラに対抗する方法を考える第 2 回打ち合わせ会
5 月 30 日（金）20：00 より法文棟 213 室（一番古い建物の政国研究室ならび）にて

▼ティーチイン「押しつけられた常識を覆す：経済の視点から」
「いまこそ発想の転換を！」実行委員会主催
5 月 31 日（土）午後 3 時から午後 6 時
場所：沖縄県立博物館・美術館講堂
「豊かさとは何か」「依存とは何か」「米軍基地は沖縄を豊かにするのか」「独立で食っていけるのか」などを論点として、これらの問題のありかを研究してきた専門家を招き、そこから多くの人が考え、また専門家に知恵を出してもらう知的空間をめざしています。
司会＝星野英一（琉球大学教授）　登壇者＝宮里政玄／平　恒次／来間泰男／仲地　博／大城　肇
資料代 500 円（終了後、カフェにて懇親会の予定あり）

＜スペクタクル＞

（6）スペクタクルに抗する落書き

■落書き反戦裁判
☞参照：Graffiti is not a crime [http://a.sanpal.co.jp/graffiti417/jp/]
　東京都杉並区の公園にある公衆便所の壁に「戦争反対」「反戦」「スペクタクル社会」と落書きした男性 K が、建造物損壊」の罪に問われた裁判。2006 年 1 月最高裁は被告の上告を棄却し、懲役 1 年 2 ヶ月執行猶予 3 年の判決が確定した。

▼被告 K による意見陳述と「スペクタクル」への言及

　私が問いたいのは、まったく不快な要素のない清潔な公園を実現するためならば、人を長期間監禁したり人の生活をめちゃくちゃに破壊することが正当化されるのか、ということです。杉並区の公園課の課長に、また警察に通報した住民にも問いたい。公園のトイレの外観を保持するためには、私のような区民は痛めつけ追放したいと考えるのでしょうか。もしもそのような考えをもっているのであれば、民主主義とは相容れない危険思想の持ち主であると断罪せざるをえません。

　私たちが暮らす街には、たくさんの表現が氾濫しています。そのなかには、不快な表現も数え切れないほどあります。商品の広告やチラシ、電車の吊り広告などに、腹立たしい思いをすることはたびたびあります。それでも、広告に対しては、人々は概ね寛容に受け入れています。公園のトイレの外壁に「戦争反対」と書かれていることが、どれほど不快でどれほど犯罪的だというのでしょうか。
　私たちの税金を使って罪のない人々が虫けらのように殺されている、そのことに憤りを覚え意思表示をしている区民がいる、私たちの街の公園に「戦争反対」と書かれない方が不自然です。私たちの税金が勝手に人殺しに使われてしまうことと、私たちの公園のトイレがいつのまにか反戦キャンペーンの看板になっていることと、どちらがより許しがたい犯罪でしょうか。
　「ストリートカルチャー」が流行し、街路が「ストリートブランド」の広告で溢れる一方で、街路の自由はどんどん切り縮められてきました。ただ歩くこと、ただ眺めることは許されても、路上での集会・デモ・パフォーマンスといった行為は、厳しく取り締まられています。規範から逸脱する行為は厳しく罰せられ、また、規範そのものがますます息苦しく不寛容なものになりつつあります。かつては受け入れられていた営みが、新しくつくられた条例によって取り締まられるようになっています。
　私たちは、労働時間はもとより余暇の自由時間まで、規範に締め上げられています。労働時間は仕事の部品になり、自由時間には消費社会の部品になります。労働者の自分と消費者の自分を切替えながら、誰かに

用意された生活の回路をぐるぐると追い立てられるように走り回っています。それは資本に飼い慣らされた操り人形です。
　ただ歩くこと、ただ眺めることしか残されていないきわめて受動的な社会をスペクタクル社会と言います。それは、現代の多くの人々が感じているように、耐え難い生活です。そしてまさにそうした生活により、私たちの日々は、単調で凡庸なものの中に埋没させられます。
　わたしたちの暮らす都市や街路は、警察や一握りの住民のものではありません。不特定多数の市民のもの、みんなのものであるはずです。
　私が書いた「戦争反対」、「反戦」、「スペクタクル社会」という文字は、人々に受け入れられるべきだし、消されるべきではないと考えます。[1]

　私は本事件の翌日から起訴前まで、公安刑事の取調べをほぼ毎日受けました。落書きの行為よりも書いた内容、それは政治的内容であったが故に私の思想に介入してくる取調べが何度となく行われました。
　例を挙げますと「君は戦争に反対なのか？」「最近あったイラク戦争をどう思う？」　「スペクタクル社会とはどういう意味なんだ？」「君は今の社会に不満なのか？」といったことを言われました。　また、「君はノンセクトか？」「三里塚闘争を君はどう思っているんだ？　是非持論を聞かせてくれ」といった私の政治的立場に対する介入も度々ありました。[2]

　私は落書きしました。書いた内容は政治的内容です。しかし国家権力はこの書いた 内容によって建造物損壊罪を適用してきました。これは明らかです。これは裁判官も検事もほんとうのところ解っているはずだと思います。書いた内容によってこの裁判 自体が成り立っており、そして裁判が双方の主張を争う場である以上、私は書いた内容について述べる事ができると考えます。
　これからスペクタクル社会について述べたいと思う。それがスペクタクル社会の事なのかどうか私ははっきりと解らない。本当のところのスペクタクル社会なるものを知っている人なんて誰一人としていない以上、裁判官は私の陳述をさえぎることはできない。
　本事件で私が勾留されている時、「救援会を結成しようと思うがどうか」と持ちかけられた。私は「YES」と答えた。保釈後、私はデモや集会で本事件のことを発言した。そこで自分が本事件の当該、つまり落書きした者だということも言った。
　ここに一つの滑稽なスペクタクルがあった。落書きする者は逮捕されたら負けだ。　そして「非合法」の落書きは匿名性が重要だ。にもかかわらず私は自ら進んで匿名性を無くしていった。のうのうとそれをやっていた。このスペクタクルに私は数日前に　気づいた。自分が紛れもなくスペクタクル化されていることを実感した。スペクタクル化される事は日常茶飯事だが、こればかりはレベルが全然違う。
　知ったときは絶望感しかなかった。全身震えが止まらなかった。この時になってはじめて私はスペクタクル化されることの恐怖を感じた。
　ギー・ドゥボールが『スペクタクルの社会についての注解』の中でこう言った。
「スペクタクルというものは、おそらく今世紀に産み出された最も重要な出来事で　あり、また、あえて説明される事の最も少なかったものである。事情が異なれば私もこの主題についての私の最初の仕事『スペクタクルの社会』だけで大いに満足し、続きを見ることは他人に任せる事ができたかもしれないと思う。だが、我々のいるこの時代において、それをするのは他に誰もいないと私には思えたのである。」
　私はこの言葉の意味がわかる感じがする。
　私は当初の最終意見陳述を作り直すことにした。
　理由は上述したスペクタクル化された事に気づいたのが理由だ。
　確かに政治弾圧に対し、抗議・キャンペーン活動をやっていくのは大事だ。事実やってきた。だけど、この落書き事件でそれをやった方が良いのか悪いのか。また、やるなら別のやり方があるのではないのか、今、私はわからない。情けないがわからない。
　ただ、この最終意見陳述は自分が言いたい事を言おうと思った。
　一定程度でも落書きする者だとバレた時点で、この裁判が有罪無罪に関わらず私の負けだ。開き直りで言いたい事を言う。[3]

▼ スペクタクルについて

　生産の近代的条件が統べる社会において、すべての生はスペクタクルの巨大な集積として現れる。かつては直接に経験されたものは、いまや表象の中に遠のいてしまった。

　マルクス『資本論』「資本主義的生産様式が統べる社会においては、社会の富は商品の巨大な集積として現れる」を翻案したドゥボールの文章。

---

[1] Kによる第1回公判意見陳述、2003年6月16日[http://a.sanpal.co.jp/graffiti417/jp/struggle/statement-k_20030616.html]。
[2] Kによる第5公判意見陳述、2003年12月17日[http://a.sanpal.co.jp/graffiti417/jp/struggle/statement-k_20031217.html]。
[3] Kによる第5公判での本人意見陳述、2003年12月17日
[http://a.sanpal.co.jp/graffiti417/jp/struggle/statement-k_20031217.html]

> 情報やプロパガンダ、娯楽の広告やその直接な享受といったさまざまな個々の形式の下、スペクタクルは社会的に優勢な生の現在のモデルを構成する。スペクタクルはまた、生産およびそれに伴う消費における、すでに為されてしまった選択を、至るところで肯定する。スペクタクルの形式と内容はともに、既存のシステムの条件と目的を、全体的に正当化する。スペクタクルとはまた、現代の生産の外で生きられた時間の主要な部分を占拠する限りにおいて、上で述べた正当化の永遠の現前であるのだ。[4]

注目され魅了されるような経験（スペクタクル＝見せ物）の一部分が、生とは切り離されたイメージとして反復される。次第にその虚構＝虚偽が、社会的な事実として全体を覆うようになり、それ自体が、生の経験を構成するような事態となることを理論化。

▼ アンテルナシオナル・シチュアシオニスト、フランス５月革命、壁の落書き

> 68 年５月のソルボンヌ占拠運動で、シチュアシオニストは占拠の中軸となって活動した。［中略］そこで彼らが主張したことは、闘争における徹底した直接民主主義の貫徹（具体的には、運動における代理制と指導一被指導の関係を産み出さぬよう、既存の党派による運動の懐柔を拒否して、すべての決定を総会に委ねることをあらゆる機会に主張した）であり、占拠運動を大学だけにとどめず工場、病院、公共機関へと拡大させることであった。そのために、ソルボンヌを「人民の大学」という実験場に改造し、「スペクタクル的、商品社会」を日常生活のレヴェルから転覆させるさまざまな行動を実践していったのである。占拠が始まって３日目の５月 16 日、彼らが「ソルボンヌ自治人民大学占拠委員会」の名で発した「あらゆる手段を用いて今、普及させるべき合い言葉」というビラを読めば、彼らの関心がどこにあったかがよくわかる。ソルボンヌで普及されるべき「合い言葉」、すなわちスローガンは次のようなものである。
>
> すべての工場を占拠せよ
> 労働者評議会に権力を
> 階級社会の廃絶
> スペクタクル的一商品社会を打倒せよ
> 疎外の廃絶
> 大学の終焉
> 人類は、最後の官僚主義が最後の資本主義のはらわたとともに吊るされる日まで幸福にはなれないだろう
> くたばれポリ公
> ５月６日の略奪で逮捕された４名も解放せよ[5]

■デ・ラ・ベガ、落書き、コミュニティ

▼ James De La Vega
http://www.delavegainternational.com/
http://youtube.com/user/lunchtkts
http://www.myspace.com/jamesdelavega

イースト・ハーレム在住のプエルトリカン、ペンやチョークで詩、プエルトリカンのヒーローたちなどを描くグラフィティ・アーティスト。2003 年７月ブロンクスの壁に落書きをしたことで器物破損の罪に問われる。1 年間の保護観察のかわりに求められた罪状認否で「建造物に傷つける意図があった(his intent was to damage building)」と証言することを拒否したため訴追され、2004 年敗訴。50 時間のコミュニティ・サーヴィスで、地域の子供達のための絵画教室を開催。同年、ニューヨーク州議員に立候補し「ライト・イン」キャンペーンを展開。現在は、イーストハーレムにあった自身のショップを閉め、イーストヴィレッジのセント・マークス通りに新しい店をオープンしている。

Youtube 映像より何点か紹介

■ワイルド・スタイル、ヒップホップ創世記とグラフィティ

映画「Wild Style」　（チャーリー・エイハン監督／米／1982 年／105 分）
フィクションながら、登場人物の殆どは草創期の実際のグラフィティ・アーティストやヒップホップ DJ で構成されている。現在流通するヒップホップ・カルチャーの持つイメージとの落差によって逆説的に、その後のメディアがいかにストリート・カルチャーのフレーミングを行ったかを理解できる。

映画「ダウンタウン 81」（エド・ベルトグリオ監督／米／2000 年／71 分）
ジャン・ミシェル・バスキア主演映画。ロイサイダの荒廃の風景が映し出されるほか、スクウォッターの排除、グラフィティが体制的アートへと変質する様などを描いている。

ドキュメンタリ「ヒップホップ・リデフィニション」（ジャヒィ監督／米／2002 年／93 分）

---

[4] ギィ・ドゥボール『スペクタクルの社会』
[5] 木下誠「『転用』としての闘争：シチュアシオニストと 68 年」[http://d.hatena.ne.jp/situationniste/20061006/p1]

大学で開催されたアカデミックなヒップホップ会議の記録やライブ会場でのインタヴューを収録。アフリカ・バンバータ、グランド・マスター・キャズなど、オールド・スクール、ミドル・スクールのアーティストたちが、自身たちの創造してきた文化について再定義を試みるドキュメンタリ。

■246 表現者会議
http://kaigi246.exblog.jp/

▼ 渋谷 246 ギャラリー問題

「渋谷 246 ギャラリー」問題をめぐる第一回「表現者会議」に出席した。
この日は別の連絡会議もあったので、途中でぬけたが参加者は 14 人で、14 人の中には美術雑の編集者やライターはひとりもいなかったようだ。
（みんな「ＧＥＩＳＡＩ MUSEUM2」の取材にでも行ってたのだろうか）。
あいにくあまり時間がなかったので、「ギャラリー246」の壁画「春の小川」を現場で見てみて、「アート作品」や「デザイン」としてどう思ったかということを主に話した。
たしかに、絵そのものは、いかにもファンシーで、いかにもカワイク、そして、いかにもイノセントで、ソフトタッチな図柄なのだが、その図柄とは裏腹に、そこには或る強烈なメッセージを感じざるを得なかった、と発言した。すなわちそれは、「立ち止まるな、考えるな、忘れろ、そして、とっととこの場所を通りすぎて、ショッピングにでも行ってろ」というものだ。ちょっと大げさ過ぎるかもしれないが、そう思った。とはいえ、街の「ジェントリフィケーション」を進めたがってるクライアントが求めていたのは、まさしくそういうものだったはずなので、そういう意味では、クライアントの要望にまるまる 100 パーセントこたえた（こたえすぎてしまった？）「コミッションワーク＝嘱託作品」なのだが、それによってアートやデザインの「何か」が失われてしまってるような気がしてならなかった。会議の詳しい内容については後日、主催者たちからレポートがあると思うが、とりあえず現時点ではまだ「日本デザイナー学院」との「対話」の見通しは立ってないという。[6]

■ワンダーウォール・キャンペーン
▼ 先行例としてのバンクシーの試み
banksy in the West Bank [http://www.youtube.com/watch?v=XXSg8BApBwA]
▼ワンダーウォールキャンペーンの呼びかけと実施
http://www.youtube.com/user/osasimiichiban
http://www.youtube.com/watch?v=_UCG2DRzQuQ

「パレスチナにはいたるところに隔離壁があります。この壁はイスラエル政府によってつくられました。この壁によってパレスチナの人々は自由に動くことができません。そして 24 時間体制で管理されています。今、この壁に世界中のアーティストやアナキストがグラフティやステンシル、ポスターなどを描いています。この動きによって、今、パレスチナ・ベツレヘムの隔離壁がひそかな観光スポットになっています。隔離壁の観光化が進むことによって、世界中にイスラエル政府のパ レスチナに対する隔離政策が少しでも伝わると思います。そして、なにより、薄暗い壁を楽しい絵でいっぱいにしてしまうのは、なんともおもしろいことだと思います。そこでわたしたちも、この流れに乗ろうと考えています。絵やポスター、ステンシルなどを今月 1 月 23 日までにイレギュラー・リズム・アサイラムに届けてください！時間があまりないですが、どうぞよろしくおねがいします」。

http://www.youtube.com/watch?v=F9fRF7eXNFM&feature=user

■次回６月６日は・・・(7) カルチャー・ジャマーの反乱

［<スペクタクルに抗する落書き>たとえばこんな参考文献］

ロビン・D・G・ケリー著、村田勝幸・阿部小涼訳『ゲットーを捏造する：アメリカにおける都市危機の表象』彩流社 2007 年。
高祖岩三郎『ニューヨーク烈伝：闘う世界民衆の都市空間』青土社 2006 年。
ハキム・ベイ著、箕輪裕訳『T・A・Z：一時的自律ゾーン』インパクト出版界 1997 年。
『現代思想』特集・グラフィティ（マルチチュードの表現）青土社（2003 年 10 月）。
ギィ・ドゥボール著、木下誠訳『スペクタクルの社会』ちくま学術文庫 2003 年。アンテルナシオナル・シチュアシオニストについては、オンラインで多くのテクストを入手可能。「アンテルナシオナル・シチュアシオニスト・オンライン文庫」http://homepage.mac.com/araiken/antel0.html
落書き反戦裁判についての論説については「graffiti is not a crime」Web サイト内に詳細なリストがあり。参照されたい。[http://a.sanpal.co.jp/graffiti417/jp/reported/]。

[6] イルコモンズ「「渋谷 246 ギャラリー」と「ルート 181 ギャラリー」[http://illcomm.exblog.jp/6829832/]